武蔵野日曜聖書講筵

陣営より出でて御許へ

――ヘブル書第13章11～16節――

１９８９年11月19日
小池辰雄

キリストの中に祈入即帰入　永遠の生命の現実　五十年目のヨベルの年　陣営の外で焼かれる
棄てられるひと　キリストに遺されたる者　陣営より御許へ　私の残された課題　キリストの
中に遺れる者

【ヘブル13】

11大祭司、罪のために活物（いきもの）の血を携えて至聖所に入り、その活物（いきもの）の体（からだ）は陣営の外にて焼かるるなり。12この故にイエスも己が血をもて民を潔めんがために門の外にて苦難を受け給えり。13されば我らは彼の恥を負い、陣営より出でてその御許に往くべし。14われら此処には永遠の都なくして、ただ来らんとする者を求むればなり。15此の故に我らイエスによりて常に讃美の供物（そなえもの）を神に献ぐべし、即ちその御名を誉むる口唇（くちびる）の果（み）なり。16かつ仁慈（なさけ）と施済（ほどこし）とを忘るな、神は斯のごとき供物（そなえもの）を喜びたもう。

●キリストの中に祈入即帰入

今日の話は、私の第十巻の「12月19日　陣営より出でて御許へ」のところです。ヘブル書13章13節の前後からやります。

11月のキリスト新聞に毎週、檄欖の欄に私は「遺（のこ）れる者」という――こないだ「エン・クリスト」40号にも書きましたが、あれと多少違うけれども――4回にわたって出した。というのは、私の生涯の著しい事柄をずっと書いたわけです。自己紹介みたいなものです。それで、第4番目が昨日来たんですが、ちょっとお読みしておきます。

「ヤコブの家よ、イスラエルの家の残ったすべての者よ、生まれ出たときから私に負われ、胎を出でたときから私に持ち運ばれた者よ、私に聞け」（イザヤ書46・3）。さて、私の信仰生活は一九二三年から無教会山脈の中を歩いて来たが、四〇年の九月、長兄の命日を記念して、失明した母のために自宅の一角を会堂として、武蔵野福音集会を開始した。そして、四二年の春、天からの霊感で「幕屋」という名称を賜りこれはヒルティの「眠られぬ夜のために」の或る所を読んだときにです。ヒルティがそう言っているわけではないですけれども、

武蔵野幕屋と名づけた。神の歴史は創世記から黙示録まで幕屋の動的な旅で、その一環を承っての旅と自覚したからである。

だから、そういう意味においても、私は無教会と意識が違うんです。

ところで、一九五〇年の晩秋、私の詩篇に共感された手島郁郎氏の招きで、阿蘇の垂玉温泉で開かれた特別聖会で詩篇の講義をした。その祈祷会で私は天界から臨むキリストの霊光に撃たれ、聖霊で全身が痺れて平伏した。帰途の汽車の中で聖書を繙くと、今まで覆っていたベールがとれていた。聖書は聖霊のバプテスマを受けなければ読めない本だということがはっきり分かった。眼から鱗の如きものが落ちたと告白したパウロにアーメンである。爾来、私は使徒たちの天的次元の山脈を登攀することになった。死をもって私に一対一の伝道をしてくれた長兄政美と、失明しても一度も愚痴を言わず神の愛に生きそして死んだ母に対して、遺れる者である私は、イザヤの子のシェアール・ヤーシューブ（「遺れる者帰り行く」の意のヘブライ語）の名を実として、そういう名を子供につけた。これは私の名だ、自分の名でもあるということ、キリストの中に常に祈入即帰入した。母と兄の弔い合戦を聖名にあって福音のために貫かざるを得ない。我々は第二次大戦に命を失った多くの同胞の遺れる者として福音のために全存在をささげて進もう。」

そういう文章です。本当にこの第二次戦争でたくさんの青年が犠牲になった。そういうことを思うと、我々は彼らの魂に――靖国神社のことを言っているわけではない――生活をもって応えなければならない。とにかく、お国のためにとんでもない政治の間違いから犠牲になった人たち、その死をいたずらにするわけにいかん。我々はその責任を負っているわけです。そういう連体観念を本当に持つことが愛国の気持なんです。「愛国」というと、すぐ国旗のことを思う。また国旗を思うと、すぐ愛国と言う。その「愛国」という言葉が非常に誤解されている。内村鑑三先生はそんな意味で「愛国」と仰ったわけではない。内村先生、藤井先生の愛国の精神は貫かなければならない。

●永遠の生命の現実

こないだ岡山で、結婚式の披露宴でもそのことを私ははっきり言った。日本人は太陽を国旗にしている。太陽の国旗なんていうのは世界一だ。太陽がなければ地球もないし、我々生きとし生けるものは全部在りえない。自然的存在としては太陽に絶対に依存している。そのことを本当に自覚すれば、素晴らしい国旗だとなぜ思えないか。霊的存在としての我々はキリストの御霊にはっきり生かされている。

また、もうほとんど非常に危険な、癌の末期の方をお見舞いしました。素晴らしい魂の女の方です。その時に――面会謝絶なんです。けれども、「私はキリストの使いだから入るよ」と言って入りまして――しっかり手を握って、永遠の生命の現実で祈りました、生死を超

越して。そして、素晴らしい次元に入った。とても喜んでいました。あの笑顔を私は忘れることができません。

そういうことで、我々はいわゆる信仰ではない。使徒たちは本当にみなひっくり返された。地上でキリストと一緒に居たときにはだめなんだよ、ペテロなんていうのは。躓いたり転んだり。けれども、ペンテコステの後で、使徒行伝のペテロを見ると、完全に変わっている。

「わがうちにあるものを汝に与える」

というのは、キリストの霊の力です。生まれつきの跛者が立ったでしょ。

とにかく、無教会では、――私はなにも神癒のことを強調するわけではないけれども――ひとりとして、塚本先生といえども、内村先生といえども、一人の病いを本当に癒したか。それだけの力をいただいていたか。事実、そういう証明がない。私は先生方のそれぞれのなさったこと、実存には敬意を表します。先生方はそれぞれの役割を果たされた。けれども、無教会がいつまでもそれではだめだ。

今読んだように、私は手島君と一緒にその使徒達の聖霊の次元に入れられた。カトリックでもプロテスタントでもない。この使徒的信仰でいかなければだめなんだ。なにも、カトリックやプロテスタントをけなしているのではない。カトリックの歴史にも、プロテスタントの歴史にも素晴らしい方々がいます。みな聖霊の器です。

ところが、無教会では「十字架、十字架」とばかり言って、聖霊のことはほとんど出てこない。もちろん書いていらっしゃいますよ、けれども、「について」書いたってだめなんだ。本当に体験されて、そこから告白しないことには。告白を遠慮することはひとつもない。これはパウロの書翰にいっぱい書いてあるでしょ。そのことを私が言ったために、また、私の集会でも、躓いて幾人かの人が出ていった。私は孤軍で天に万軍がいるから

「孤軍万軍」

という言葉を使うんですけれども、それでやってきた。

あなた方は、それを求めて、また、それに与かって今、進んでおられる。けれども、十二召団が全部そうだとは私は思っていません。人間の在り方というものはみなそれぞれ欠陥があります。そんなことを問題にしているのではない。

「本当に十字架を受けとっているか、本当に聖霊を受けとっているか」

と。この二点だけなんです。どうぞ、皆さんは、その点で本当に

「遺(のこ)れる者」

になっていただきたい。「遺(のこ)れる者」とは、その意味において、

「キリストに本当に遺っている者、キリストの中に遺って生きている者」

です。なにも、この集会に居ることが遺れる者でも何でもない。どこにいたっていい。とにかく、

「自分はキリストには棄てられない。キリストは棄てたまわない。十字架と聖霊で

絶対的な次元に救い上げられているから」と。この自覚が本当にあれば、楽しくてしょうがない、力が来てしょうがない、楽でしょうがない。

「それは年齢や、若いの年取ったの、男の女のと、そんなことは問題でない」と、パウロが言っているとおりです。本当にパウロはひっくり返されて素晴らしいことになった。パウロの書翰がないと新約聖書はないと言っていいくらい凄い。もちろん、福音書は福音書として特別な素晴らしさを持っています。キリスト自身ですからね。どうぞ、皆さん、特に新約聖書には驚嘆驚倒しながら読んでいただきたい。完全にこれは聖霊の世界の文字ですから。観念的な十字架ではないから。パウロは、

「我、キリストと共に十字架されたり。もはや私が生きているのではない。キリストが私の中で生きているんだ。御霊のキリストだ」

と言った。この「キリスト」というのは

「御霊のキリスト」

あるいは、

「キリストの御霊」

と言ってもいいわけです。聖霊とキリストは離すことができない。十字架とキリストも離すことはできない。そういうような現実を本当に――もぅ、文字の世界ではないです――行っていただきたい。

●五十年目のヨベルの年

そういう意味で、もう来年は創立五十周年を迎えようとしている。ある人が

「先生、これはヨベルの年ですね」

と言ってくれた。五十年目にヨベルの年が来ます。レビ記（レビ25・10）に出てます。私の十巻の「1月29日」の項にも書いてあります。大安息の年なんです。この大安息の年を来年むかえて、しかも、その大安息においてもっとも凄い力がくる。

「キリストの中に安らう」

ということは、力をいただくということなんです。休むことがただボヤッとしていることではなくて、キリストの中に安らうということは、

「キリストの中で力をいただく」

こと。だから、

「キリストさま、お休みなさい」

と言って、キリストの懐に入って寝れば、翌朝は力を受けて起き上がる。そういう角度の睡眠をとれば、もう時間なんか問題じゃない。そういう在り方をぜひしてください。

種蒔きの譬え話があるが、決して、良き地にあるのだけがいいのではない。どんな道端

であろうと、石の上であろうと、聖霊が来ていれば、その種は石を破って根を下ろす。運命環境の如何によって支配されるのではない。逆に、逆境においてこそ素晴らしいものができ上がる。先ほどのお話のように、辛い大根が逆境において作れば一番甘い素晴らしい大根になる。キリストの譬えは皆に分かりやすい譬えですけれども、なおキリストの言葉の奥には、そういうことがあるんだということは聖霊が私に示した。だから、いろいろなことにでっくわせば、逆に聖霊の力は働きたもう。野菜ですらそうであるという。これは大変なことです。ノホホンで育ったものはだめなんだ。艱難に遭わないものは、本ものは出てこない。大体、本ものは、凄いものはみんな艱難に遭ってます。

「艱難汝を玉にする」

という言葉があるとおり。ですから、皆さん、いろいろなことにでっくわして、人に迫害されようが、運命の上で職業がうまくいかなかろうが、いいですよ。逆に、本当にキリストの中に祈りこんでください。必ず力がくるから。それが聖霊の世界なので、

「自分の信仰がまだ弱いとか、厚いとか」

そんなことを言っているのではない。この召団の信仰というのは、その意味で大事なんだからね。信仰ならざる信仰だ。絶信の信だ。そういうことで、どうぞ、あなた方は勇ましく進んでいただきたい。本当の勇ましさというものは、キリストの中に本当に投げ込んだところに出てきます。

●陣営の外で焼かれる

私は無教会の除(の)け者にされた。だから、今日の題に「陣営より出でて御許へ」行くと書いた。では、ヘブル書13章に入ります。

11 大祭司、罪のために活物(いきもの)の血を携えて至聖所に入り、その活物の体は陣営の外にて焼かるるなり。12 この故にイエスも己が血をもて民を潔めんがために門の外にて苦難を受け給えり。13 されば我らは彼の恥を負い、陣営より出でてその御許(みもと)に往くべし。

ヘブル書は特にヘブル人に当てた手紙で、

「旧約の世界からいかにこの新約の世界が違うか」

そのことが非常にはっきりと語られている素晴らしいところです。塚本先生の「ヘブル書」という素晴らしい註解もありますけれども。大祭司は年に一回、民の罪の贖いの執り成しをやるわけです。だから、

「活物の血を携えて至聖所に入る」

という。これは年に一回です。犠牲の献げものは旧約聖書の形態ですから。それは傷なき羔(こひつじ)です。しかしながら、体は汚れたるものとして「陣営の外で焼く」んです。これは妙なものだね。陣営というのは、神の幕屋を中心にして旅をするときに、他の幕屋はたくさん

ありますから、神の幕屋を中心にしている、その形を「陣営」というんです。これは幕屋の陣営なんです。その外に置く。この場合のヘブル書の記者は、この陣営は旧約聖書のユダヤ教の陣営というような意味にも中身はとっているわけです。

だから、「己が血をもて」、今度は動物の血ではない。キリストは罪なき己が血をもって、民を贖い清めんために門の外で、エルサレム城外で十字架に架けられた。非常に惨憺（さんたん）たることです。

私はこの前ドイツでキリスト受難劇を見ましたが、役者たちの真剣さはもちろん敬意を表しますけれども、しかし、キリストばっかりはまねができない。ある意味においては、真似してはいけない。劇にはできない。映画も、その姿をあまり映すべきものではない。それくらいに私は思います。逆に言えば、大いにそれはやっていいということも言えないことはないですけれども。しかし、キリストは「救い主」ですからね、救い主を人間の側から演ずるのは、どうも、私の意識ではちょっとできないね。だから、見ていて余りいい感じがしなかった。

完全に、キリストはそのために門外に、ユダヤ教から迫害されて棄てられた。ユダヤ教徒ばかりではない。ローマの官憲、また民衆もまた彼に背いた。ついて来たのは少数の女性と、ヨハネはついて来たね。

ヨハネというひとは生まれつき、非常にスーッと愛の世界に入れる人だ。だから、キリストが特にヨハネを愛し、ヨハネ伝では自分のことを、

「主に愛されたる弟子」

なんていう言い方をしている。そうすると、キリストは依怙贔屓（えこひいき）をしたかと、そう思ってはいかんですよ。愛の表れ方はいろいろなんです。ヨハネには、そういう表れ方をなさった。ペテロにはペテロに対する表れ方がある。

一人ひとりに、キリストの愛の表れ方というのはそれぞれいろいろです。太陽の光は一つだけれども、それが現象する面ではいろいろなんです。人間の相互の関係、人格というものは絶対に相互の比較をしてはいかん。それは人格として取り扱ってない。A、B、C、Dと、あなた方はたくさんいる。これはみんなキリストと直結なんです。キリストと直結の事態は比較ができない。まぁ、キリストでなくてもいいよ、お釈迦さんでも。とにかく、「魂が在る」ということは「絶対界のものである」ということなんだからね。だから、

「万人は宗教人である」

と申し上げているとおりです。信仰がなくたって、あったって、そんなことは問題でない。

とにかく、人間一人一人は他のものと置き換えることができないということが、人格者という意味なんです。あなた方一人一人は天下一品なんです。学問ができようができまいが、性格がどうであろうがなかろうが、とにかく、神さまに造られたものは皆それぞれ、欠陥があろうがなかろうが、それが人格というものです。だから、神さまの顧み方はそれぞれ

なんです、その一人一人に。決して全体主義ではない、画一主義ではない。そのように

「顧みられている」

ということは、

「愛されている」

ということです。

だから、人をうらやんだり、人をさげすんだりする必要はひとつもない。これが聖霊の世界に在るとはっきりします。私の集会から出ていった人を私はひとつも憎んでいませんよ、それぞれの意味で想っています。そういうところにいなければ、私には聖霊は働かない。そんな相対的なことは正直、問題にならない。本当にキリスト者というなら、

「キリストの御霊なき者はキリスト者にあらず」

とパウロはローマ書の8章9節ではっきり言っているんだ。

●棄てられるひと

だから、この御霊の世界です。このようにして、キリストは完全に人に棄てられて、また、神さまからも棄てられたかのごとくだ。

「わが神、わが神、なんぞ我を棄てたまいし」

と、こんな悲痛な言葉はない。

「あなたに百%に私は従ってきました」

と。キリストは本当にそうだから。百%だ。百%に従った義人なんだ。百%に神様に従った人は一人もいないんだ、パウロが言っているとおり。

「その私をなぜお棄てになるか」

と。これは反語的な言葉ですね。

「私は棄てられるひとではない」

と、逆に反語的な響きなんです。

「私を棄てたら、あなたの神の義は立ちません。神の義、福音は成り立ちませんよ」

と、こういうわけだ。だから、あとの言葉で、

「彼らを赦してやってください」

と。これは義と愛が貫いているキリストの十字架の言葉です。

「私はあなたに棄てられて、贖いの死をとげます。だから、この贖いをもって彼らを赦してやってください」

というわけです。それはいわゆる仏教的な大慈大悲とちがう。キリストという犠牲において、義がつぶされているような犠牲において。そこではじめて、義も立ち、愛も立つ。なぜ、義が立ったか。キリストは甦った。甦って天界へ行った。この甦って天界に行ったこの実存は義の現れなんです。この義はいわゆる正義ではない。神の意志の体現されたところです。

神の意志は愛の意志ですから。そうしたから、今度は

「助け主をお前たちにくだしてやる」

と。これが聖霊です。聖霊の中には義と愛がこもっている。十字架と聖霊は絶対に離すことができない。そのことを内村鑑三先生も仰らない。内村先生の『一日一生』の「5月31日」の所は素晴らしいところだけれども、そこでも御霊のことが出てこないね。クリスチャンの実存を素晴らしく言ってらっしゃるところがあるけれども。内村先生は聖霊の火花は散っていた方です。でなければ、文章にあんな力はない。けれども、惜しいですね。

●キリストに遺されたる者

「汝らは我よりも大なる業（わざ）を為（な）す」

というのは、

「お前たちを通して、私はいよいよ大きな業をしていくぞ」

ということ。このキリストの十字架・聖霊を本当に受けたのは数人しかいない。これが新約聖書を書いた。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ、パウロ、ペテロ、ヤコブ、これらの人しかいない。それが新約聖書の本を書いた、書かされた。本当の福音の世界は大衆の世界ではない。福音は、キルケゴールも言ったけれども、

「天才よりもクリスチャンは少ない」

とはそのことです。ただ人数が増えたから、伝道が成功したなんて、そんなことを思うようなことではだめなんです。ある人が或る人に電話をかけて、

「小池先生の集会は聖霊の集会で素晴らしいのに、なぜ人数が増えないか。五千人位いてもいいはずだ」

なんて言った人がある。それをまたその人が私に書いてきたね。私は、

「ああ、そうですか。私は数なんか問題にしてません。本ものだけを問題にしてます」

と答えてやった。

この歴史において本当に原動力となっているのはみんな一人です。あるいは、少数の方です。神の国は、そのような事態をあなた方一人一人が正に一騎当千となって、人に認められようが認められなかろうが、けなされようが、一向差し支えない。本ものは必ずそれが神の国の宝石となり、土台石となっていきます。

「何人でなければどうのこうの」

なんて、そんなことではない。

どうぞ、皆さんはキリストに遺（のこ）されたる者になってください。それは、本当に十字架・御霊の生命に生きていく。伝道は一対一でいいです。一対一の伝道。伝えざるを得ない。この「ざるを得ない」という世界であって、ただ

「ああ、私は救われた。あり難し、あり難し。おしまい」

なんて、それはダメだよ。それはちょっと天国にいけなくなる。パウロはあれだけの大伝道をしたが、さて、その中の何人が本当に救われたかは、また別問題です。けれども、そういうような本ものを通して、神の歴史はずうっと世の終わりまで続いていきます、絶対に。福音そのものの力です。キリストの御霊そのものの力、イエス・キリストの力です。そういうことで、どうぞ、皆さんは、この五十周年を迎えるにあたって、いよいよ決意ならざる決意をもって、いや、実に大希望をもって進んでいただきたい。

●陣営より御許へ

陣営より御許へ。私は無教会陣営から出たし、出された。それで御許に行き、使徒たちを――パウロさん、ペテロさん、ヨハネさんを――天界の先輩として、導者として、友として進んでいるわけです。楽しくてしょうがない。無教会の人たちが、

「いやぁ、小池さん、あなたの言うことはやっぱり本当だった」

と、誰も言ってこない。いいよ。「聖書の研究」なんて、研究で聖書の世界には入れない。研究が悪いとは言ってない。聖書の現実の中に自分を投げ込んで、降参するまでは、この世界に入れない。はっきり、

「参りました！」

と。でなければ、この驚くべき世界には入れない。

どうぞ、そのようなことでやってください。だから、時に及んで、不思議なことが起きます。神さまはあなた方をそのようにお使いになる。いいかね。

「誰が残ったか、残らないか」

と、そんなことを私は言っているのではない。お一人お一人が、

「私はキリストには絶対に棄てられません。大丈夫です」

と、それだけの救いの安らかさ、力強さをたまわっていかなければね。自分の側の何ものでもないですから。そうしたら、楽しく歌をうたいながら進みましょう。なにか、しょげたような顔をしてたらだめだよ。

「歌いつつ歩まん」

という聖歌（498番「主にすがるわれに」）があるじゃないですか。讃美歌をもっと歌ったらいいですよ、皆さん。朝来たときにも、大いに讃美歌を歌ってください。感話もいいけれども、讃美歌を大いに歌っていた方がいいよ。本当の意味で賛美だもの。私はありがたくてしょうがない、このキリストをいただいて。

「イエス・キリスト」

といえばもう、その内容はもの凄い、表現できない。

それはお釈迦さんとはちがいます、ケタが違う。私は仏教の第一流の坊さんは尊敬するけれども、拝みはしないよ。彼らは如来の世界で素晴らしいところに入っている。キリス

トの直弟子の次元と同じような次元に入っている。凄いよ。

いいですかあなた方、クリスチャンがですよ、一人一人がそういう世界に在り得るんだから。それが本当の「遺れる者」なんだ。まぁ、パウロさんの書翰を読んでごらん、楽しくてしょうがないから。ちっとも難しくないんだ。

なにも、私は無教会の悪口を言っているのではない。

「いわゆる律法的な、観念的な、あるいは御利益的な、そんな陣営からは出ましょう」ということです。みんなそれぞれ素晴らしいところに来ています。大いにやってほしい。ただ、本当に素晴らしいのはキリストだけです。いいね。

「ユダヤ教の陣営、本当の幕屋でない幕屋、それから出て」ということ。キリストは

「神の幕屋」

黙示録の最後に出ている神の幕屋です。我々は

「聖霊の幕屋」

です。世界のクリスチャンは

「キリストの幕屋」

の中にいる。誰がいるか、どこの集会がいるか、そんなことは誰も分からん。マルチン・ルターもカトリックの陣営から出てしまった。なにも、出るつもではなかった。ところが、出されてしまった、破門されてしまった。仕方がなしに、

「プロテスタント」（反抗する者）

と言われた。我々は自分自身にプロテストしながら進んでいくんです。

●私の残された課題

「己を憎まずばわが弟子となることはできない」

とキリストは言われた。いや凄いよ、自分を何ものともしなくたったら、本当に。その凄さがわかるかな、あなた方は。

「まだ私は……」

なんて言って、まだ自分をある程度、何％か肯定しているうちは、御霊の百％の世界には入れない。

まぁ、しょうがないね、これは。だから、どうしても私はそれをある一つの詩でもって表現しなければならない。その課題が一つ残っている。その詩の中には、いわゆるクリスチャンなんか出てこないよ。例えば、吉田松陰なんかが出てくる。西郷南洲も出てくる。おもしろいよ、私の詩（『霊界の星々』１９９８年８月29日刊）は。仏教徒も、坊さんも出てくる。天国はクリスチャンばっかりの世界ではないんだから。もうそれは概念で説明できないです、実例でいくよりか。そういう神の国が今に来るんだ。こんな世界は今にひっくり返っちゃ

う。大事な美わしいこの地球という水星を――私は地球を水星と言っているんだ、水がたくさんあるから――これを損ねてしまって、おかしなことにしてしまって、今になって慌ててどうのこうのと始めているわ。「グローバル・プロブレム」とか言ってね。あの偉大な政治家のグラッドストーンが、

「政治家が一番悪い」

と言っている。政治家と軍人。それは黙示録の所にでてくる。権力者、あんなものはみなひっくり返ってしまう。

いいですか。そういう大希望を夢みながら歩いてくださいよ。私は本当によくいい夢を見るよ、不思議な夢を見る。もう夢だか、現（うつつ）だか分からないような。どうでもいいようなことにゴタゴタしなさんなよ。

寝てもS姉さんなんてのは――寝ても覚めても酸素吸入をしているが――素晴らしい魂だよ。こないだも見舞いに行って、もう永遠の生命の現実で祈った。

「神さま、キリストさま、生死を超越した本当に永遠の生命を、S姉さんと一緒に私はいただいて行きます」

と、そういう現実で祈っているんです。

「治してください」

ではない。もぅ、この福音の熾んなることがらは、

「聖書のこれはどういう意味だ」

なんて、意味の詮索ではないんですから。いいですね。キリストの、聖書の文字に圧倒されながら、文字の奥から響いてくる、そういう読み方をしてください。

信仰は、今が天国なんだから。

「やがて来る」

ではない。天国の中を歩いているんだ、我々は。

「キリストに在る」

というのはそういうことです。

寝る時に床（とこ）の上に端坐して祈ると、霊動が起きる。そして、外を見ると、昨日なんかも、弦月が、下弦の月がだいぶ遅くなって出てくる。そして星がある。星を見ていると本当に神秘になるね、神秘の世界に。

「いやぁ、宇宙というのは大変なもんだなぁ」

と思ってね、宇宙に散歩したくなるよ、本当に。私は数学や物理ができれば、天文学をやりたいくらいだな。全く神秘だよな。あの光は何年前の光だろうかなんて。今見ているけれども。何光年だとか、何十光年だとか、何百光年なんて、大変なもんだ。我々にはそんなでっかいのはもう肉眼では見えないけれどもね。その中の粟粒みたいな地球の上でもってガタガタやっているんだから、情けないよな。

「何をガタガタしているか」

と。しかし、

「その大宇宙を散歩するような心をいただく人間というのはまた何と凄いものだ、神さまは凄く造っていらっしゃるか」

と。パスカルが言うとおりだ。

●キリストの中に遺れる者

13 **されば我らは彼の恥を負い、陣営より出でてその御許（みもと）に往くべし。**

「彼の恥を負い」とはキリストの十字架のことです。十字架の恥を負う。私たちも十字架を負って――福音であらざるものがこの場合の「陣営」だ――福音ならざるところの陣営から出て、その「御許」に、キリストに直結しようということ。キリストに直結する。

私はこのヘブル書13章13節は自分で体験してきたから、何ともいえない句なんです。まぁ、天界の兄貴も驚いているかもしれない。死ぬべきはずの兄貴でなかったのが死んだから。これはもう、兄の死を徒然（いたずら）にならせては申し訳けない話です。人生は悲劇だね。悲劇の終わりは大勝利になる。悲劇の終わりが大勝利になるものだから、ダンテも「ディビナ・コメディア」「喜劇」みたいに言った。ベートーヴェンも死ぬ時に、

「喜劇は終わった。歓呼せよ」

と言った。皆さん、

「いろいろな事にでっくわせば逆に、キリストに本当に愛されている」

ということを感じてくださいよ。

14 **われら此処には永遠の都なくして、ただ来らんとする者を求むればなり。**

「永遠の都」は最後の、歴史の終わりの新天新地の新しきエルサレムだ。

15 **此の故に我らイエスによりて常に讃美の供物（そなえもの）を神に献ぐべし、即ちその御名を誉むる口唇（くちびる）の果（み）なり。**

「口唇の果」とは讃美のことです。讃美歌です。

16 **かつ仁慈（なさけ）と施済（ほどこし）とを忘るな、神は斯のごとき供物（そなえもの）を喜びたもう。**

この「施済（ほどこし）」という字は「コイノニア」という字なんです。コイノニアというのは「愛の交わり」のこともいうし、それから「施しもの」のこともいう。人に物を上げたり、神に捧げたり、これはみな「コイノニア」なんです。素晴らしい言葉だね。具体的に愛を現す。皆さんがいつもいろいろやってらっしゃることです。

まぁ、そういうわけで、神の国が来るまで、キリストの中に遺れる者として進んでいきましょう。おわります。